
あい らぶ

後藤 萌愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あい らぶ

【Zコード】

N7791M

【作者名】

後藤 萌愛

【あらすじ】

愛空高校に入学する竜宮真麻と上山楓子。

期待に胸をふくらませ入学。でも初日からボイコット。

男子一人を追いかけ屋上へ・・・。

男子の名前は翼と海里。

幼なじみと同じ名前の男子に真麻は・・・。

そしていきなり真麻のもつてている重病、心臓病の発作が!!
真麻と楓子。翼と海里。四人で繰り広げるせつないラブストーリー。

「プロローグ」 「春」 「入学」 「海里？」

「プロローグ」

あなたの目に私はまだ映つてますか？

あなたの目に私はまだ生きていますか？

私は今もあなたが好きです。ずっとそばで見守っています。

「春」

春がきた。桜ふぶきが舞うなか私、竜宮真麻は愛空高校に入学する
ぴちぴちの高校一年生。

新しい高校生ライフに期待の胸をはずませている今日この間。
新しい勉強に新しい友達、新しい出会いの予感がする。
にこにこしながらかばんから写真とひとつの一びんを出した。

「海ちゃん。今、なにしてるのかな・・・。

会いたいよ・・・。約束・・・、覚えてるよね??」

一人写真に話し掛ける自分。写真に写るのは私の幼なじみ、村田海
里。

ちつちつやこころからずつと一緒にで兄弟みたいとも言われたほどだっ
た。

でも、海ちゃんとの別れは突然にしてやつてきた。

「遠くに行くの。だからまあちゃんとお別れしなきや。」

親の都合で遠くの県に移動することになつた海ちゃん。

そのときはずつと一緒にいられると思っていた幼い私はショックが
とても大きかつた。

分かれる寸前海ちゃんが渡してくれたのがこのブルーの一びんだっ
た。

「まあちやん、こいつが必ず会おう。そのときまで」これを大切に持つていてね。僕のお守りだよ。

お母さんがきれいなブルーの色をして海みたいなこのじぶんを買ってくれたんだ。

「これを僕だと思って待つって。さみしくないでしょ？」

すきとおった瞳で海ちゃんは笑顔で言ってきた。

その笑顔は今でも忘れられない。

ブルーのこじぶんを太陽に照らしていたら向こうに知つてこる顔が映つた。

上山楓子。わたしの親友。楓子も小学校からの長い付き合い。

「まーあーたー。何見てるのー？」

長い茶髪のロングの髪の毛を桜ふぶきになびかせながらくつろぎた目で聞いてきた。

「海ちゃんのこじぶん見てたの。」

楓子はにやりと笑つた。

「真麻はほんとに海里君が好きだね~。」

ニヤニヤ笑いながらあたしをちゃかす楓子。

「からかわないでよ。」

精一杯の対応をする私。

「ほんとのことでしょ？」

楓子が釘を打つ。

「うひ・・・・。ほんとです・・・。」

やっぱ楓子にはかなわないな~。

「てかわ・・・。」

楓子がなにやら重そうに口を開けた。

「真麻。心臓大丈夫?」

ドキッ

楓子・・・。

そつ。私は心臓病を抱えている。医者からは20歳にはなれないと診断された。

それほど悪化してきてるのである。

毎朝と毎晩。薬をたくさん飲まなきゃいけない。とても苦しい毎日。でも楓子がいたから乗り越えられてきた。いつもはげましてくれていた。

それから海ちゃんにも・・・。

「だいじょぶ、だいじょぶ。

このごろ軽く動いても発作が少なくなってきたし。」

笑顔で言う。もう誰にも心配はかけたくない。

「そつか・・・よかつた。」

複雑そうな顔。うすうす嘘に気づいているのかな。

お互ひ黙り込んでしまった。

キーンコーン カーンコーン

「やっぱ。鐘なっちゃつたあ。今日は入学式だよ！…遅れられない。走るよ、真麻！！」

いきなりなにかがきたように声をだした楓子。

「了解。」

つていつても心臓次第。発作が起こらないことを祈りつつ軽く小走りに走る私と私の荷物を持って学校までダッシュする寸前の楓子。初日早々、大量の体力を使つた私にはこれからなにが起くるかなど予想もつかなかつた。

（入学）

やつとのことで学校についた私と楓子。幸いにも発作は起こらなかつた。急いで朝の準備をし入学式会場へ・・・。つと思つたときに入学式会場の体育館と反対方向に行く男の人2人組み。

「初日早々ボイコットすんのかな？」

楓子が興味ありげに聞いてくる。

「よくやるね〜。って、早く行こ。遅れるよ。」

焦つているあたしと反対ににんまりしている楓子。もしかして・・・

・・・。

「ねつ。うちらもボイコットしよーよ。」

言つと思つた。楓子はたぶんあの男の人たちと話をしたいんだな。
「えー。でも、初日ボイコットは・・・。まずいんじゃない?」

心配性な性格の私。と反面にやる気まんまんの楓子。

「いいじゃん。いいじゃん。あの男の子たちちよーかっこよかつた
よね?！」

「そりかなー。」

あんまり顔は見えなかつた。私はその前に入学式がきがかりだつた。
「行こつ。決定ーーー！」

無理やり私をひっぱつて連れて行こつとする楓子。待つてえええ
えええつ。

楓子が走つて追いかける。くつ・・・、ぐるじー・・・。

楓子が勢いよく屋上のドアを開ける。

「あつ。いた！」

「へつ?！」

あやふやな答えしかできない私。ますますじく苦しむ。

「あのー?？」

男の人たちに楓子が話しかける。

「すごいですね。初日からボイコットつて。」

男2人は不思議そうな顔で見ている。

「あんたら誰?」

茶髪でピアスをしている男が言つ。なんか、かかわらないほうが多い
いような・・・。

「えつと・・・。あたし上山楓子で、この子が龍宮真麻ちゃんです。
一年だよ。みるしくね。

あなたたちの名前は?何年生ですか??

楓子が自己紹介をしている。立つのがつらい。

「俺が日比野 翼。で、こいつの寝てんのが椎名海里。一年生だよ。」

「

えつ？？海里？？

「えつ、海里？！」

楓子もびっくりしたのだろう。

「う・・・んん・・・・」

ドキッ 起きた？

「ねみ～。ん？誰、あんたら。」

海里つていう人が聞く。

きれいな瞳。ふわふわした髪。でも黒い髪。

「あたしは上山楓子て言います。この子が竜宮真麻ちゃん。一年で
す。」

「ふーん」

興味がなさそり。

「海里さんつてゆうんですね。あたしたちの友達にもいるんですよ。
ねつ。真麻。・・・つて。

真麻顔色悪くない？？」

「えつ・・・。」

やばい発作がかってる。息ができな・・・い。
視界が狭くなつていく。

フラツ

「ちょつ。真麻ーー！」

トン・・・ 何かによつかかつてる？？

「大丈夫か？？」

黒い髪。きれいな目。海里さん？

でもこの手のかんじは違う。海ちゃんじやない。

「海ちや・・・じやな・・・い。離れ・・・て・・・。」

精一杯の声。ふりしぼつて出す声。

「あんた何言つてんの？」

ぼやけてくる。あつ、こりゃ倒れるな・・・。

バタンつつ

「真麻――――――？」

「おこ……」

「海里？ 海里？」

「まあちゃん。虫取りに行け。」

「海ちゃん……。待つて……。」

「まあちゃん。ほら、早く～。」

「海ちゃん。海ちゃん。待つて。」

「待つて！！」

「はつ？！」

「あれ・・・？ 白い部屋。」

「ここは……。」

「保健室だよ。『めんね真麻』。あたしが無理やり屋上にひっぱりまわしてたからあー。」

「大ジョブ大ジョブ。」

楓子が隣に泣きながら座っている。その隣に……翼さんだけか？ そしてあたしの反対の隣に海里さん。

「海ちゃんは？」

「海ちゃん？！」

不思議そうな顔をする男一人。

「海ちゃんってゆうのは田村海里ってゆうひかりの友達で……。」

楓子が途中まで説明して口を閉じる。

「あたしの幼なじみだよ。」

あたしが付け加えて言つ。

「へー。」

そして沈黙。誰も話さない。

するどすっと我慢していたようになつて海里さんが口を開いた。

「お前……なんか病気もつてんの？」

ギクッ ジウシヨウ。血しづきか？ でもひかれたらどうしよう？ 。

「えつと、その。」

一生懸命言葉を探す私に海里さんが口を開いた。

「無理して言わなくていいから。」

「うん。」

氣を使つてくれたのかな？あんがい優しい人なのかも。

「あのっ。海里さん。」

「ん？何？つてか”さん”やめてくんね。”海里”でいいから。」

「海里？！なんかいきなり恥ずかしくなったな・・・。」

「じゃあ、海里。ありがとね。優しい人なんだね。」

氣を使つてくれてほんとに助かった。

「あつ、うん。」

あれ？照れてる？

「あつれれ～。海里君照れてんじやない？」

楓子がいたずらに言ひつけた。

「うつせ。」

顔をすぼめる海里。かわいいな。

いずれ海里にしつかり気持ちを持つて言える日が来たらひょおひ。こ
の病気を・・・。

「プロlogue」 「春」 「入学」 「海里？海里？」（後書き）

初めて書いた小説です。

まだ完成ではありませんが読んでいただけたら幸いです。

真麻と楓子と翼と海里のよんかく関係を書いていくつもりです。

そこに幼なじみのもう一人の海里が関連していくような感じです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7791m/>

あい らぶ

2010年10月13日03時50分発行